

報告と討議 2

## 子どもの心の中の性

### —性の理解・死の理解—

西平 直

「子どもと死」というテーマに、かなり長い期間関わってきた私は、ある時期から、この話題にある種の「危険」を感じ始めた。たとえば、「子どもと死」と題して学生たちに話をする。学生たちはとても真剣に聞いてくれる。しかし、まさに、その「真剣さ」が気になり始めたのである。教室という空間で生じるその真剣さは危険ではないか。たとえば、その真剣さの中で、ある学生は、今まで身近な人の死に出会ったことのない自分を不安に感じてしまう。別の学生は、死と向き合ったことのない自分を真剣さが足りないと責めたりする。「感動できない自分を不真面目と感じてしまう」構図なのである。

しかし、本当の問題は、私の側である。私自身が真剣になりすぎる。学生たちの心に響くことを求めるあまり、「感動的な」話を用意してしまうのである。死のテーマは扱いにくいどころか、実は語りやすい。そして結果的に「癒し系」の効果を持つことよって、今の時代、好んで受け入れられてゆく。

そうした問い直しを始めた頃、以前から気になっていた「性」の問題が浮上してきた。（多少なりとも精神分析をかじった者として）幼児期における性の問題は、たえず気になっていた。「死の問題」と「性の問題」をワンセ

ットにして考えたい。あるいは、死と性の両側から、「人生の問題（いのちの問題）」を問い直すべきである。ところが、いざとなると、性の問題を話題にできない。気恥ずかしいということだろうか、どうにもやりにくい。そうした話題ならもつと得意な先生がいるだろうから、なにも戸惑いながら私がやることはない。そうやって自分と言いつづけていた。

しかし、今回、二つの点で考え直すことにした。ひとつは、性を語る際の「戸惑い」を簡単に越えたりしない。むしろ大切にする。もうひとつは、それに比べたら、死の問題は「やりやすい」。真剣になればなるほど深まるように思えてしまう、その「やりやすさ」の構図こそ、実は、「落とし穴」ではないか。

では一体、死を語ることで、性を語ることは、どのように違うのか。「死んだらどうなるの」という問いに対する戸惑いと、「どうやって生まれるの」という問いに対する大人の側の戸惑い。一体どの点がどのように違うのか。つまり、性を語ることに含まれる「やりにくさ」から、逆に、死を語る問題を問い直し、それを通して「いのちを語る」困難を確認したいと思ったのである。

そのための手始めとして、子どもの頃の「性の理解」を思い出してみる。子どもの頃、どのように理解していたか。たとえば、「子どもはどうやって生まれるの」という疑問を感じたことがあったか。それを誰かに聞いてみたか、そのとき、どう対応してもらったか。（この「性」は、さしあたり、誕生・出産・妊娠・生殖……とゆるやかに理解した。その前提こそ、今後の最も重要な検討課題である。）

以下、そうした簡単な問いかけに答えてくれた学生たちの言葉である。

## 一 漠然とした疑問

\*：おそらくは弟（二歳年下）が生まれる時、「赤ちゃんはどうやって生まれるの？」と母親に聞いた覚えがあります。母が「お父さんとお母さんが仲がいいと生まれるのよ」と答えたので、小学校高学年くらいまで、夫婦が仲がいいと、自然にお腹がふくれて赤ちゃんができるのだと思っていて、（他の面ではかなり

マセがきだつのですが) どうやって身体は夫婦の仲のよさや恋人を見分けるのか疑問でした。：

\*：私も幼い頃、よく母親に「弟がほしい」と言っていた。そんなとき母は必ず「お父さんと相談してみるね」と返事をしていたので、赤ちゃんはお父さんとお母さんの、何か共同の出来事を通じてやってくるものだと漠然と思っていた。：

かなり多くの学生たちが、こうした「漠然とした疑問」を報告する。しかし、不思議に感じるその焦点は、学生により(子どもにより)微妙に異なる。たとえば、ある学生は「父親との血のつながり」を不思議に感じ、こう書く。

\*：父と血がつながっているということの意味がわからなかった。TVゲームやアニメでも「…の血を引く」という表現があったが、実際に子どもを産むわけでもない父親と血がつながっていたり、父親に顔が似ているということが不思議でならなかった。子どもはどうやって生まれるのかという質問よりも、まず母にたずねたのは、「もし子どもがおなかにいるときに、お父さん以外の男の人がそばにいたら、生まれてきた子どもはその人に似るのか?」というものだった。母は「そうはならない」と答えた。：

「そうはならない」と答えたお母さんは、心の中でどんなことを思っていたのだろう。やはり、頭が真っ白になっていたのだろうか。「それ以上聞かなくてよかった」という親の側の正直な報告を思い出す。このあたりの事情を、別の学生は、こんなふうに報告してくれている。

\*：私は「どうやって生まれるの」という問いを、小学校に入る前くらいのときに母に尋ねたことがあります。そのとき母は「精子と卵子とが合わさってできるのよ」と言ったので、「どうやってそれが合わさる

の」と聞くと、「男の人と女の人が互いに好きだと自然とそうふうになるの」と言われました。私はその話を中学生くらいまで信じていたので、性行為の存在を知ったときは相当ショックだったのを覚えています。そのときは「母は嘘をついていたんだ」と少し嫌悪しました。…でも今ではそのことに感謝しています。…

「精子と卵子の結合」という生理学的事実と、「性行為」という人の営み。まして、その背景をなす女と男の感情的な恋心までそこに重ねて理解するのは、単なる「知識の伝達」とは、かなり位相の異なる出来事であるのだろう。はたして、両親が不仲である場合、この関連は、微妙なことになる。

\*…小学校三・四年で科学的な性教育を学んで、自分が生まれてきたことが分かりましたが、両親が不仲だったのであまり実感がわかず、あえて自分の誕生についてたずねることもしませんでした。…

子どもによって、同じ「性の事実」であっても、その意味合はずいぶん違う。せめて、多様であるというその事実だけは確認しておきたいと思う。

## 一 一 気まずさ

ところで、こうした質問を親にぶつけて、「気まずい」思いをしたという経験もしばしば報告される。

\*…私は大人に「死んだらどうなるの」と質問した覚えはないが、「子どもはどうやってできるの」と聞いたことがあるのは覚えている。そのとき母は「知らない」と言って逃げてしまった。その気まずそうな様子から、私は性に関する質問が家の中ではタブーであることを感じ取ったような気がする。性に関しては「自然に知る」というのは完全に大人の「幻想」だと思う。

こうした場合、親はどう返答すればよいのだろう。「もっと大きくなったらわかるよ」とか、「まだ知らなくていい」とか、大人の側の苦勞が思いやられる。死の問いと同様、大人の側にも心の準備が必要なだろう。この質問を親にぶつけて、その場で丁寧な答えてもらったという報告には、まだお目にかかったことがない。

その代わり、親の側が準備を整えて「説明してくれた」という報告は、時々見かける。そして、その時は、今度は子どもの側が戸惑ってしまふ。

\*…小五のとき、姉と一緒に両親から性教育を受けた。しかしそのときのことは、コンドームを見せられたことしか覚えていない。多分恥ずかしくて真剣に聞いていられなかったのだと思う。でも、それがなかったら、エロ本などの歪められた情報で、間違った知識を身につけていたのだと思う。…

また、別の学生は、母親からこうした話を聞いたとき、その話の内容より印象に残ったのは、母親の「…これは笑ったりふざけたりして口にするようなことじゃないのよ」という言葉だったという。「その当時その理由もわからなかったが、それを問う気にすんなれないほど、その言葉の雰囲気は圧倒された」というのである。

しかし、こうした報告は少数であって、多くの親は、話題にするどころか、ともかく隠してしまう。そして、そのときの親の困惑を、子どもたちは（学生たちは）よく覚えている。たとえば、一緒にテレビを見るとき、ラブシーンなどになると「即座にチャンネルを変えてしまう」父親についての報告など、実に多い。そして、これまた親の側に同情したくなるのだが、学生たちの報告を見る限り、こうした場合、子どもの方が「冷静な観察者」である。親は完全に見抜かれてしまっている。

もっとも、中にはこんな報告もある。「…親とTVを見ていてベットシーンが出てきても、両親は特に何も言わず、私自身は、これはお酒やタバコみたいに大人だけがやる娯楽なんだ、となんとなく思っていました。…」

一体、どういう親は（どういうタイプの人は）「チャンネルを切り替え」、どういう親は、そうした場面も子ども

もと一緒に見てしまえるのか。そして、その違いは何に由来するのか。子どもの頃の「育てられ方」なのだろうか。それとも、こうした対応の違いなど「たまたま」のことであって、その人の人生などと結び付けて考えること自体、ある種の偏見なのだろうか。

### 三 教えることか

ところで、私たちは、誰かから「教えられる」ことがない限り、性の事実を知らないのだろうか。「…性は、教えてもらうまで、決して知るといえることではないのではないか。どこかで知識として知ることがないと、どうして子どもができるのか分からない。…」

はたして、ある学生は、そうした話をする機会がまるでなかったから、「中学になるまで、子どもは結婚した夫婦が区役所かどこかで登録し、順番になったらもらってくるものだと思っていた」という。今の時代、そうした子どもがそれほど多いとは思われないが、では一体、学校という場は、そのためにいかなる任務を担っているのだろうか。

\*…その子が知りたいと欲する以前に語ってしまうことは、子どもの世界を本当にぶち壊してしまう気がします。…：知りがつたときは、教えてあげればよいのかもしれない。しかしそれ以外のときには、性は秘め事という感情を、語る側が持っていて、恥じらいや戸惑いを持ちながら語ることで、性は秘め事という感覚を間接的に子どもに伝えてゆく、それは現代社会においては大切なことのように思えます。…

このあたり、「学校における性教育」の問題として今後の課題であるのだろう。しかし、少なくとも、教室での話題が取り上げられるとき、子どもの側もかなりの戸惑いを感じていることは確かである。仮にふざけているように見えても、その内側には「ある種の緊張」がある。そのとき、教師が、そうした戸惑いや緊張をどれだけ共有できるか、そのあたりがひとつの鍵であるのかもしれない。

\*：思春期の子どもは、性について知りたいと思うのと同時に、知りたくないと感じている一面があるのではないか。：

あるいは、子どもの心の中で「性と恋」が十分に結びつかないうちに、「性と生殖」が性急に結び付けられてしまふとき、独特な困惑が生じる。

\*：結婚して子どもを作つて家庭を持つのはよいこと、しかし、異性と接するのは悪いことという考えがあり、自分が大人になるという実感がまったく持てなかつたということがあつた。：

こうした学生たちの報告は、あらためて私たちを黙らせることになる。  
最後に、少しばかり、「特殊」と思われる報告である。

\*：四歳の時に、ちようど弟が生まれました。コウノトリやかほちゃのことは気にならず、ただ母親のお腹の中から出てくるものだと思つていました。ただ、弟は帝王切開だったので、出産は、すべてお腹を切り開いて出てくるものだと思ひ、その道具は包丁だと聞いたこともあつて、出産は非常に痛そうで、恐ろしい行為だと子どもながらに思いました。：

こうした恐怖と、たとえば「生殖に対する嫌悪感」とは、なんらか関連があるのだろうか。あるいは、そうした恐怖は、どれほど多くの子どもに共有されるものなのか。もしくは、そうした恐怖に対して、「科学的な」性の知識や出産の知識は、いかなる意味を持つのか。

そして、もうひとつ、考えを進めてゆく中で、「中絶」の問題に言及した学生は、死と性とを重ねてこう書いて

きた。

\*：身近な死の経験がない人が多い今、「自分の子の死」が、一番最初の身近な死となることが多くなるかもしれないということに深い悲しみを感じます。：

まさにこの一点においては、死と性とが、分かちがたく結びついている。そうした悲しみまで視野に入れながら、しかし、本来「エッチ」であって当然な、「性を語る」ことの戸惑いの前で、しばらく立ち止まってみたいと思う。

子どもの頃、私たちは、一体どんな「死生観」を手探りで創りあげていたのだろうか。そして、子どもたちの前で、私たちはどのように関わるのが求められているのだろうか。

(にしひら・ただし 東京大学大学院教育学研究科助教授)